

針葉樹會報

通卷第七十號

針葉樹會十年史稿 (一)

増山清太郎

(一)

いま、誰に頼まれもしないのに、針葉樹會の十年を語らうとする。省みて甚だくすぐったい氣持である。

過去の憶出を喋々して快感に浸る氣持と、歴史を編む態度とは、本質的には全く異つた概念である。にも係らず、兩者は往々にして混同される。いま筆者の述べやうとするのは、そのいづれにも屬しない。いはゞ、將來針葉樹會史を編む人のために一の資料として、私一個人の見た針葉樹會の十年間を、ありのまゝに語らうとするのである。

筆者が商大に入學して間もなく、辛酉記念日で、一橋の記念式に出席した。悲愴極りない聲をふりしぼつた「校を去るの辭」の獨唱？などの後に、福田徳三教授が二時間に亘つて講演を行つた。その内容は一橋發展史上に於る辛酉事件の意義といふやうなものであつたが、一橋の歴史に暗い豫科一年生の能く理解する所ではなかつた。たゞ冒頭に教授の述べた言葉

「自分は今迄この記念式には一回も出席しなかつた。その理由は、徒に過去の憶出話に花を咲かせることは、好まないからである。併し克く考てみるに、辛酉事件の史的意義を考察することは、前述の氣持と矛盾する譯ではないので、今日始めて出席する氣持になつたのである」

といふのが、強く私の胸を打つた。言葉は簡單であるが、この態度の中に、一橋があらゆる荆棘を抜いて、今日に達した理由が覗かれるやうに思つたのである。私は、その氣持を去りたくない。仍つて私一人の見た過去の針葉樹會を赤裸々に述べて、一橋山岳部發展史上の一機關たる針葉樹會に對し、一の批判の材料を提

供したのである。

「日本國民史」の五十巻を祝ふ席で、碩學三上參次博士は徳富蘇峯に對して次のやうな教訓を垂れた。

「自分の經驗して居ることは簡単に述べられるやうに思ふものであるが、それはいけませぬぞ、歴史といふものは、却て自分が知らないで色々な文獻などを集めて來て編纂するのが本當で、なまじひに片鱗などを知つてゐると正確なことは書けませぬぞ、この日本國民史の五十巻迄は宜いが、これから後明治時代になれば、徳富蘇峯さんは明治時代を経て來て居られるし、或場合には政治的に働いて居られるので、それが爲めに却て誤りをせられる點が多くなるさ云ふ處がありますぞ。」

云ふ迄もなく筆者は、始めの五年間は學生として、後の五年間は會員として、針葉樹會には深い關心を持つた。針葉樹會の十年は三上博士の所謂「自分の經驗してゐること」に屬する。この意味でも筆者の述べる所は歴史であり得ない。この十年間の登山史が研究されて始めて針葉樹會に歴史的意義が生れる。その時に處するためにも、私は一の材料を提供したいのである。

筆者は怠け者である。生れてから今日迄日記を書いた事もないし、山に登つても、同行者に命ぜられぬ限り、記録をとらない。その私が歴史めいたものを書かうとするのは大きな矛盾である。そんな次第で、この史稿は決して深い意味のあるものではない。尻切れどんぼに終るかも知れない。然し述べる所は卒直に、筆者の目に映じたまゝに、述べさせて戴くつもりである。

(二)

私達が集つて、自己紹介をさせられる時に「大正何年卒業」といふ古めかしい言葉を使つて名乗を上げるのは、僅に奥野綱重・中川孫一兩氏だけ、續いて今は會員籍はないが、松倉榮司氏が昭和二年である。この外にもまだ山岳部の先輩は居た筈だが（例へば神戸商大助教授金田近二氏の如き）、兎に角昭和二年秋、筆者が入部を許された時に、實質的にはこの三人以外に先輩を持たなかつたもの、やうである。たつは三人では、團體めいたものを作る必要はない。山岳部の色々な會合には、この三人を招待するのを例としてゐたやうに思ふ。處が昭和三年三月には、吉澤一郎・五十嵐數馬・村尾金二・松木謙三・渡邊九郎・矢作太郎・小栗吉雄の七氏、即ちそれ迄の山岳部の中樞が卒業したので、先輩群が急に優勢になつた。そこで、先輩學生間の連絡を圖る必要から、また先輩同志の顔を見合ふ都合から、ある企てが起つて來るのは當然の運命であつた。それは例年春秋に行はれる、先輩學生野外懇親會といふ形式で誕生したのである。

昭和三年四月二十九日、調布多摩川の向岸、集る面々は先輩群から奥野・中川・吉澤・松木・村尾、學生頭近藤氏に率ひられて、高木・森竹・中島・磯野・金田・横倉、まだ他にもゐたかも知れない。その頃も學生のサービスは到れり盡せりで、近藤氏の如き前日實地踏査を行ひ、農家から鍋釜まで借りて置た程である。例の通り（といつても、まだ例は無かつたが）飲み、食ひ、語り、歌ひ、記念撮影を行ひ、誰かど立つた儘滑り台を滑つて勇敢に轉

んださか、小川が飛べないで靴を脱いで徒渉したさか、珍談も残して歸途に就いた。その電車の中で、この日の試みの有意義だった事を認め、將來毎月一回、定期的に如水會館に集まつて、歡を共にしやうとの話が持上つた。(註一)

かくて、同年五月十八日、如水會館中集會室に於て、最初の例會は開かれた。劈頭吉澤一郎氏から、この會を開くに至つた経緯に就て説明があり、今後毎月日を定めて會合を行つては如何と提案された。もとより反對のあらう筈なく、直に實行に移されたのである。

この日取きめた事は、毎月第三金曜に如水會館に集まること、出席先輩から金五拾錢を醸出して會費に充てること、最近の山行に就て必ず報告すること、などであつた。會の名前はきめなかつたが、會館の揭示には「一橋山岳部之會」とあつたやうに記憶する(註二)幹事もなく、従つて通知は出さないが、當日は萬障を繰合はせて出席するといふ仕組である。金曜日を撰んだ理由は、勤め人に都合よく、山行の邪魔にならず、豫科三年の授業が一橋で行はれるからで、第三週を採つたのは、その月を象徴するに最も好いからださうである。

その晩の話題には、多摩川の記念撮影、特に醉顔朦朧となつた奥野氏が、上衣を脱いで體をくの字なりに曲げて、腰に徳利をぶら下げた姿などが、相當辛棘に棚下しされたやうに記憶する。その他山の話、仕事の模様など、愉快に一夕を語りすごして、夜も更けて解散した。

結局、針葉樹會發祥の日は、昭和三年四月二十九日と信じてゐる。

る。

(註一) この記念すべき會合に、筆者が参加しなかつたのは返すくも残念である。従て、そも／＼誰が針葉樹會の創立を提議したのかは筆者の知る所ではない。尙この日の記念撮影は、中島嘉一郎氏追悼録「菰野菊」に載つてゐる。就て参照せられたい。

(註二) 「一橋山岳部之會」といふと、如何にも學生が主催したやうに聞えるが、事實は左様でない。先輩と學生とが、渾然一體となつて、この會を興したのである。而してこの會は現在吾々が針葉樹會に見るやうな、はつきりした内容を持つ「團體」ではなくて、毎月顔を合せる所の一の「集會」に過ぎなかつた。

(三)

第二回の例會は、六月十五日に前月のやうに盛大に行はれた。席上學生を代表して故中島君から、夏の計劃に就て説明があつた。光岳をヒカリ岳、易老岳をエキロ岳と讀んで誰かから苦情を云はれて、「まだ行つた事のない所だもので……。」と頭を搔いた姿が未だ目前に浮ぶ。そして七・八兩月も在京者は集まることにしたが、實際は先輩が二三人集つただけらしい。九月には吉澤氏の轉任を送り、十月には五十嵐氏の上京を迎へたので盛會であつたが十一月十二月頃になると、大分影が薄くなつて、あるのだけなのだが、判らなくなつて來た。

針葉樹會が生れて、名前も無く、幹事もあなかつた事は前回に述べたが、實際に世話人を勤めてゐたのは、吉澤・松木兩氏であ

つた。いま其の一角が缺けたのだから、相當氣勢が殺される。それに、通知を出さないが各自目を忘れないで出て来い、さういふ仕組にも無理がある。加之、先輩が増したとはいへ、在京者は十人に満たず、いづれも親密な間柄であるから、特に日を定めて顔を合はす事に興味も感じない事も起り得る譯だ。

こんな事があつた。學校から歸つて、今日は第三金曜日だと氣が付いた。急いで如水會館に行つて見ると、来てゐるのは松木氏一人で「俺は第三金曜には、何を置ても出て来るのだが」と、いささか不機嫌の體である。そのうちに近藤氏が周章て、やつて来て、やはり夜になつて氣が付いたといふ。三人でお茶を飲んで歸つた。時日は確さは覚えぬが、この頃のこゝである。

昭和三年も押詰つてから、松木氏が入營して、世話人がゐなくなつてしまつたので、事實上針葉樹會は活動を休止した。そして翌年の夏近くまで、冬眠状態を續けたのであつた。

この間、四月の始に、奥野氏の肝煎で、浦松佐美太郎氏の歸朝を迎へて、あちらの山の話を聞いたが、その他に例會は全然行はれなかつたのである。

初に述べた野外懇親會の續きは、九月二十九日夜、小佛峠下で雨中のお月見をやつたが、先輩は誰も來なかつた。

東京を去るの辭

近藤

「經理部會計課近藤恒雄三池染料工業所勤務ヲ命ズ」

此の辭令を恭しく讀みあげられたのが本月十日である。大體僕の三池轉勤は全く衆目の見る所十指の指す所である。針葉樹會員

諸賢中にも「近藤はもうそろ／＼危い」と云はれ又今春三池出張の時あはや三池へ決定したが如き噂が擴がつた。是れは會社の中でもそうなんだから全く當然の結果になつた様な氣もするし皆んなもその氣である。

「愈決まつたれ」なんて來る可きものが來たと云つた感じで挨拶されるのに一寸面喰ふ。

僕の鑛山會社に於ける會計課勤めも早や滿九年になんなんとして居る。實際仕事の事で學ぶ可き何物も無いのである。昔から「草鞋をはく」と云ふ言葉があるがそんな氣もする。何んだか氣持が廣々として晴々した氣分である。

扱て針葉樹會員諸兄には全く一方ならぬ御世話になつて居る。感謝の氣持で一杯である。

學校出てから此の會がある爲めどれ位精神的に力強くなつて居た事か。會社でむしやくしやして居る時も一晩の針葉樹會ですつかり更生してしまふと云つた不思議な氣分があつた。會には漂つて居る。一人／＼の會員と會ふ時もさる事ながら、會で席を並べて話す時が一番樂しかつた。何んさなく樂しいのである。

こんな嬉しい會と別れるなんて考へてもいやだ。會社にはいさ／＼かも未練はないが針葉樹會丈はあきらめられない。

そして拾數年の間親んで來た内地の山々に別れねばならないのだ。考へるさ胸がつまる。九州の山なんて僕には少しも山の様な氣がしない。あんな山には登り度くない。頂上迄自動車を通ひ頂上が麓より雜沓して居る。

だから僕はリュックも登山靴もビッケルもスキーも、忘れ難い

山への情熱も共に東京の地へ残して九州に旅立つつもりである。山に關する一切の事をあきらめて東京の地を去るつもりである。だが山の本文は離せない。どんな事があつても是ればかりは持つて行かう。一度あきらめて書いて見たが本心はあきらめられないのである。只一寸の間山へ行けない丈である。我慢すればよいのである。

どうか針葉樹會員諸兄、こんなに登り度いのを我慢して九州へ行つた男もあると云ふ事を時々思ひ出してくれ。何年の後、いや何拾年後又東京の地へ來るかも知れない。其時は腰が曲つて居ても必ず信州の山々へ出掛けるつもりである。必ず登れると確信して居る。

商大山岳部員、諸兄に一言殘して置き度い。僕は兄等に理屈なしに親しみを感ずる。出來れば何んでもしてやり度い。酒も飲ましてやり度い、山へも登らしてやり度い。何にか喜びそうな事をしてやり度い。是れが現在の僕の氣持である。針葉樹會員は本當の心の友である。であるから會員同志の間には何年會はなくても會へば昔の山を語り共に昔に返つて其の友情の間に一分の隙もないのである。

兄等は現代の登山界に群雄を退けて斷然王者の氣概を示して居る。頼もしい限りである。然し敢て苦言を提する。兄等の山友達は完全な友情を以つて結ばれて居るか、眞の心の友として相許して居るか。幾度一諸に峻險な山頂に果敢な登山を仕様とも若しも其の友の間に眞の友情に疑ひを持つと云ふ如き事があつたら登山

の持つ貴さの大部分が消えてしまふ、と僕は考へて居る。近頃僕は時々不愉快な話を聞く。どうか山岳部員諸兄よ、自重してくれ。そして本當に心の友が出來ない様な山岳會であつたらそんな會なんてつぶしてしまつても良いと考へて居る。登山技術がいくら優れ様ともそれ丈ではなんにもならない。貴い友情と結び合つてこそ初めて實を結ぶのである。

もう九州の地へ行けば現役諸君には當分會えない。語り合ふ機會もない。學生諸兄よ、どうか現在の僕の心配が一片の杞憂であると云ふ事を證明してくれ!!

十八 首

K

面白き節の中にも秋はあり秋を街行くひろめやの鉦

一杯の熱きコーヒーの胸に沁む佗びしき秋や獨り堪へなむ

悪めどもまた顧みて其の性質に憐憫覺えぬ二十四の女よ

思はぬに流れて消えし星一つ傾きかゝる秋の夜空に

友ありて生くるわが身ぞうつしよに祈れる心忘れざらめや

さもしらにわが庭べに咲き出でし黃菊の花は紫陽に向ふ

長き莖の秀に咲き殘るコスモスの花衰へて秋はゆくなり

しめやかに秋雨降れる中庭の八つ手の色の冷き光

朝の陽に片照りやはき檜の木梢に近く冬を感じぬ

雲間洩る薄日のかげの芦の湖や渡ろう舟も今は見えなく

獨り行く笹生のひらに陽はかげり愛鷹の峯に雲低ふ垂りぬ

見透かす伊豆の岬や遠霞み駿河の海は夕映えにけり

月のなき箱根の山の霧雨にほのかにしめる徑を下りぬ

散り残る櫻紅葉の五葉三葉霜立つ今朝の風に揺れぬ

冬の夜の喧騒の巷の空にして瞬き絶えず青き星光^{かげ}

こゝにして信濃は北に迫り來ぬ岸邊の芦に雪は亂れつゝ

亂れ降る信濃の雪のかなしさかまどへる果てのわれが心か

悲しみの極みに吞める酒がかなしみは消えず友よいづくに

書簡 二ツ

一月六日 木 (鳥取縣大山寺にて 堀岡清君より中川孫一君宛

端書)

新年御目出度御座居ます。

此の冬は何處へ行かれましたか。私は學生軍に参加の計畫が會社の都合で駄目になつたので、大山へ來ました。昨日頂上へ登りましたが、北壁と言ふのは涸澤に似た所で、一寸良い所です。雪も悪くはなし、スキーには良い所です。

地方に居るとき時々針葉樹會に出席がやたらにし度くなります。

會報は學生軍の登山報告にならぬ様希望するのですが?

六日

大山寺にて 堀岡 清

中川 孫一様

×

×

×

一月十五日 土 (任地函館市にて 林俊介君より柿原謙一宛端書)

先日は御見送り有難う。

無事任地へ到着、愈々雪の函館での生活を始めました。當地は積雪約一尺五寸、ひまさへあればスキーが出来ます。その中に近くから出かけ様と思つてゐます。

私の此處での生活も豫想程長くないかも知れません。部員も出来るだけ私の居る中に来るようにさそつて、是非來て下さい。

林 俊介

柿原謙一兄

×

×

×

伯耆 大山

A R A

此の紙上を借りて、先づ新年の御挨拶を申し上げます。今年は益會報の内容を充實?して我々地方在住の者にも針葉樹會席上にあるが如き感を懐かしめて下さる様御願致します。

事變に事寄せて、遂に賀状と言ふものを一枚も書かなかつたが又實際に書く暇もなかつた。と言ふのは十二月の上半月は大連經由天津、北京に出張するし、下半月は四國へ出張し廿一日の夜に

歸り、電話で休暇を交渉し元日の夜行で大山へ出發する云ふ有様であつたから。實は此の正月休には學生軍の德澤生活に飛入りする豫定で、甘ちゃん連絡を取つてゐたのだが右の如き出張続きでとうとう德澤行は駄目になつたが代りに大山へ行けたと言ふ

譯。

大山では全く偶然に中島に會つた。奥さんを貰つた事だから誘つても駄目だと思つて居たので實は書き掛の手紙を止めた位なので一時は自分の目を疑つた位だつた。でも矢張り奥さんの關係で四日に歸つた。するさ連日の吹雪は止んで五日は素晴らしい天氣になり樂に頂上の往復が出来た。堂だ中島思ひ知つたか。口惜しければ何さか言つて見ろ。でも出掛けて来る丈未だ脈がある折角心掛けろよ。

大山は小さい山だが變化があり、手頃のものとしては非常に良い山だ。雪は周圍の狀態に比しどう言ふ譯か堂も少し重過る嫌があるが野澤に決して引けは取らぬ。一五〇〇米邊では札幌附近の山の様だ。宿は大山の部落、まあ文句の言へぬ所だ。鐵道省の小屋は經費五万圓と自慢する丈あつて、一寸洒落たものだ。階下が居間兼食堂階上寢室はお定りの通りだが、野暮ならず、氣障ならず、暖房もストーブ二個で十分の様子。風呂はボイラで沸すし、便所は水洗式、水道を引くに五千圓掛けた由、先づ提灯持つても良い代物と思つた。年中營業（一泊三食一圓半）する故紅葉の時等も良いと思ふ。

御承知の道り大山寺の方面からは所謂北壁を正面に望む譯だが本谷は右股も北壁直下に於て一諸になつて廣いガレ（夏は知らないのだからはつきり分らぬが多分ガレと思ふ）となつて居るからスキーには非常に良い。言はば扇狀の谷である。どの澤もスキーを運ぶに不便のない位の廣さを持つてゐるから、Aを登つてBを下る、Bを登つてCを下ると言ふ風に遊べ、下つた所は結局本谷右股左股の出合でそれが何れも軽い半日行程と來てゐるので無理

の出来ない體には全く以て好適である。

頂上へは部落から直ぐ尾根に取付く夏道が一番樂だ。我々は本谷右股から派生してゐる澤を別山（山岳二十六年一號所載の小出氏の名稱ではリ尾根に當るものと思ふ）直下迄登り、右の廣い尾根に取付きその儘登り切つて主尾根（八合邊に當ると思ふ）に達し頂上へ行つた。時間は登り五時間下り二時間を要して居るが、此は中島の會社の友達三人と一緒に下りた爲で下りは一時間以上短縮出来る。雪漕ぎさへ厭はれば北壁、別山間の澤も、尾根も直登出来る。又上頂から劍峯、三鈴峯へも行ける。但し頂上迄の様にスキーでは歩けない。北壁は急なので新雪雪崩、底雪崩共にその危険はあるがそうたいして大きいものではあるまいと思ふ。

部落附近のスキー場としては本谷の外に豪安山、中ノ原、上ノ原、博勞座等があるが、博勞座と言ふのは宿のすぐ前の原で問題外上ノ原と言ふのは寶珠山の事で半日行程、ブナの密林を通つて行かねばならぬので余り感心せぬ、中ノ原は上ノ原へ行く途中の一寸開けた所で之も問題外。豪安山は北壁、本谷を眺めるには非常によい展望台で、頭の附近にあるボサを切ればよいスロープにもなる。今年は雪が思つたより早過ぎたのでボサを切りそこねたので來年は是非切るのだと宿の主人は言つて居た。

南側の澤も面白いと思ふが頂上へ登つた日も霧と雪庇の爲覗きも出來ずにしまつた。根據地も不便と思ふ。

兎に角一度は行つても損のない所だ。紀元節のサンドウィッチを利用して又行き度いと思つてゐるが果して堂か？ 鑛山の本店から大牟田へ近ちゃんが轉任との事一緒に行けたら大阪方面からも

引張り出し愉快な會合にならないか知らず思つて居る。

雪を見るさ北海道を思ひ出すが、帶廣の奥野さん、相變らずスキーで御活躍の事と思ひますが如何ですか。

消 息

近藤恒雄君 一月卅一日朝東京驛を發し、福岡縣大牟田市淺牟田町、三池染料工場へ轉任された。

手塚晴雄君 昨年十二月七日華燭の典を舉げ、越後は長岡の人菊江さんと御一緒になりました。

林 俊介君 一月十日上野驛發にて北海道は函館市鶴岡町三六淺野セメント函館支店に轉任す。當地にて針葉樹會員スキー宿を致すこの事です。住所は同市時任町二、早川武夫方。

針葉樹會懇親會 十二月廿二日 新橋驛前さゞ川にて

出席者 吉澤、村尾、近藤、磯野、金田、吉澤松次郎、増山、鈴木、小柳、新羅、柿原

例年の例にて忘年會を開く。關西料理を食ひ乍ら野澤小唄、安曇節を歌つて皆んな赤いオ顔になりました。奥又白に向つた現役軍の事を心配し、多幸を祈つて散會。

尙此度は吉澤松次郎氏が幹事をして世話を見て下さつたので、茲に御禮を申し述べます。

近藤・林兩君送別會 一月十日 於如水館

出席者(會員)近藤、林、中川、吉澤、村尾、久保田、吉澤松次郎、園山、山口、増山、小柳、新羅、柿原(部員)小谷部、森川、佐々木、岩崎

近く九州へ行かれる近藤君、今晚七時にて立つと言ふ忙しい林

君を主賓に、名残深い送別晚餐會を開く。林君は挨拶を残して上野驛へ向ひ、中川、小柳、柿原、森川、佐々木、岩崎の六名驛迄見送る。後近藤氏を中心に如水館別室に移り、近藤氏は會員に對する挨拶に續いて、現役軍に對しては眞心から特に銘記すべき心構への仕方を話さる。東京を去り行く人の想ひもさるこゝ乍ら、残る者の哀愁も亦一入なり。今一人去り、亦一人去らむとす。心して兩君を送る良き晚餐會なりし事よ。

カットの説明

會報第九年第一號よりカットを變えました。渡邊九郎氏の名筆に成るもので、構圖は吉澤一郎氏提供の寫真中より撰ばれた蝶ヶ岳より見たる穂高であります。年末御多忙の處を態々御苦勞下さつた渡邊氏に厚く御禮申し上げます。

編輯後記

會報第九年第一號を御送り申します。新年號と申すのにはいさゝか遅れてしまひましたが、舊曆で申しますと目下お正月ですから、曲りなりにも新年號となつた次第です。

山岳部の方では既に本年度の卒業生送別會も行はれたこの事です。會の方では此の程赤城山スキー行も行はれました。二月もなれば紀元節の休日もあり、暇の少い身ながら愉快的なスキー行を行ふことが出来ます。お互ひに希望のプランをお持合せのことゝ存じます。そこで愉快的な山行のお話でも書いて御投稿下さる機會も多いことゝ、小生は編輯者根生を發揮して居る次第です。(柿原記)